

慢性期看護実習における 学生の成長の分析

数理システム 学生奨励賞 提出論文

富山大学医学薬学教育部修士課程 看護学専攻

○北谷 幸寛, 四十竹 美千代, 八塚美樹(指導教官)

内容

1. 研究背景
2. 用語の定義
3. 研究目的
4. 研究の意義
5. 倫理的配慮
6. 研究方法
7. 結果・考察
8. まとめ
9. 結語
10. 引用・参考文献

研究背景

ゆとり教育は、学生個人の主体性や思考力の向上させることに重点を置かれて行われている

主体的に目標を持
てるような環境を整
える



臨地実習の学習の効果が高まる？

学生個人の実習の目標を立てられるように実習形態の変更を行い、目標管理ツールとしてポートフォリオを導入することとした。

用語の定義

- **ポートフォリオ**

未来をひらく目的のために実績歴，活動歴，目標到達への軌跡などを一元化したファイルのこと

- **成人看護学1実習**

三年次後期に行われる，慢性期領域の看護学実習

研究の目的

成人看護学1実習に参加した学生は、実習後どのように自分が成長したと捉えているのかテキストマイニングを用いて成長の内容を明らかにする。

研究の意義

- 学生が実習でどのようなことに達成感を感じるのか、ということがわかり、満足度の高い授業計画の立案への示唆となる.
- 学生の感じる成長は、教員が重点を置いて指導していること、ないしは、学生が成人看護学1実習で最も大事と考えていること、と考えられる. それらを明らかにすることは、教員側の教育体制の偏りを示唆することで、反省を促すことになる.

倫理的配慮

- 実習開始時にポートフォリオの記載内容は、成績に関係ないこと・途中棄権が可能であること、を説明した。また分析は、対象の学生がすべて卒業した後に連結可不可能な状態で匿名化し、行った。

研究方法

- 対象

2010年～2012年において、A大学の成人看護学1実習を履修した学生で研究協力を同意が得られた学生162名

- 研究期間

2013年8月～10月

分析方法－第1段階

分析は2段階に分けて行った。

・第1段階

- ①ポートフォリオに成長したことBEST3を実習終了時に記載。
- ②成長したことをすべてエクセルに入力，連結不可能な状態で匿名化し逐語録を作成した。
- ③逐語録をTEXT MINING STUDIO VER4.1(以下TMS)に入力し基本情報・話題分析を行った。

分析－第2段階

・第2段階

- ① 話題分析の結果，クラスタ名に相応しくない原文が含まれていたため，原文を2人の研究者でコード化し，一致するまで議論した。
- ② 再度そのコードを用いて，話題解析を行った。
- ③ 話題解析の結果，「把握・個別性」というクラスタに着目し，コードではなく原文に立ち返り，TMSに入力して単語頻度分析・言葉ネットワークを行った。

TMSの分析の流れ

第1段階 (原文)

- ・基本情報
- ・話題分析

第1段階では全文を対象に分析を行った。クラスタ化後に文章のカテゴリー化を考えたが、クラスタに適切でない原文が含まれてしまった。

第2段階 (コード →原文)

- ・話題分析
- ・基本情報
- ・単語頻度解析
- ・言葉ネットワーク

第2段階として一旦文章のコード化を図り、分析を行った。するとクラスタ名から著しい逸脱がなくなったため、クラスタの特徴を見ていくため分析を行った。

結果・考察—第1段階

基本情報

表1.原文の基本情報

項目	値
総行数	485
総文数	500
平均文長(文字数)	16.4
述べ単語数	962
単語種別数	830

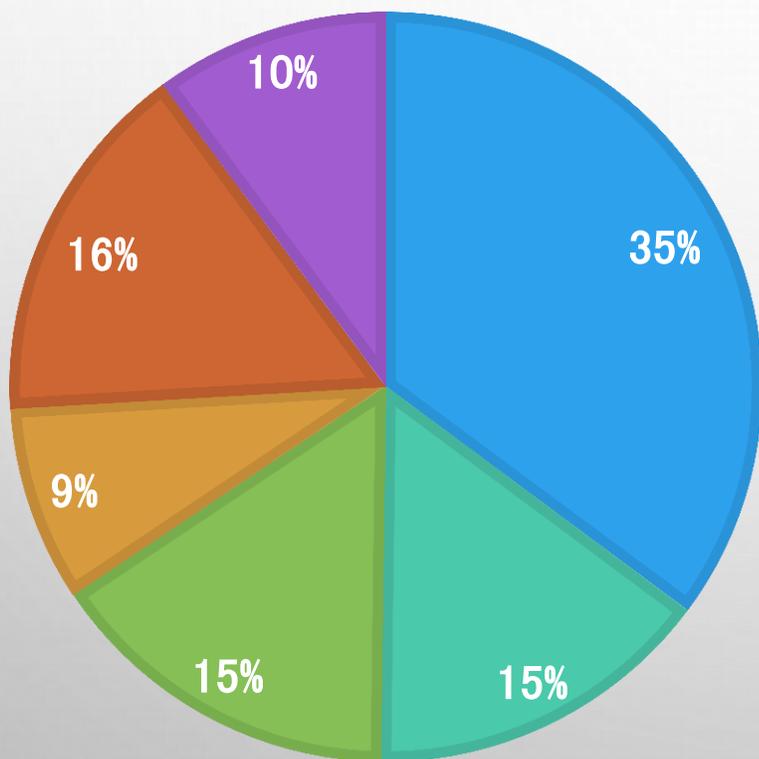
表2.原文の品詞と出現頻度

品詞	出現数
名詞	2154
動詞	673
副詞	54
連帯詞	38
形容詞	31

- ・タイプトークン比0.280
- ・名詞2154 動詞673 形容詞31
副詞 54 連体詞38であった。
- ・学生が実習での成長がどのようなものか、何をできたのか、という言葉に注目する。また、品詞の出現頻度から動詞・名詞・形容詞に 限定する方が成長を特定できると考えたため、分析の対象を動詞・名詞・形容詞に限定した。

話題分析

- No1.ケア
- No2.バイタルサイン
- No3.情報収集
- No4.看護師
- No5.思い
- その他



・まずデータ全体の大まかな特徴とその傾向を知るために、原文に対し話題分析による文章分類を行った。
・「ケア」「バイタルサイン」「情報収集」「看護師」「思い」「その他」にクラスタ化された。



・自身の看護技術，患者・看護師との関係，に自身の成長を感じていると考えられた。

図1 原文の話題分析のグラフ

しかし、

クラスタ名に相応しくないと判断できる原文が含まれていた。

(例:「ケア」に遅刻しなかった, 毎日朝食を食べることができた)



- 研究の対象とした文章の内容の複雑さ
- 文脈の豊富さ
- 機械的な操作による分類の限界
など, が考えられた。

結果・考察—第2段階

話題分析1

- No.1 把握・個別性
- No.2 考える
- No.3 看護技術
- No.4 思い
- No.5 理解+できる
- No.6 その他

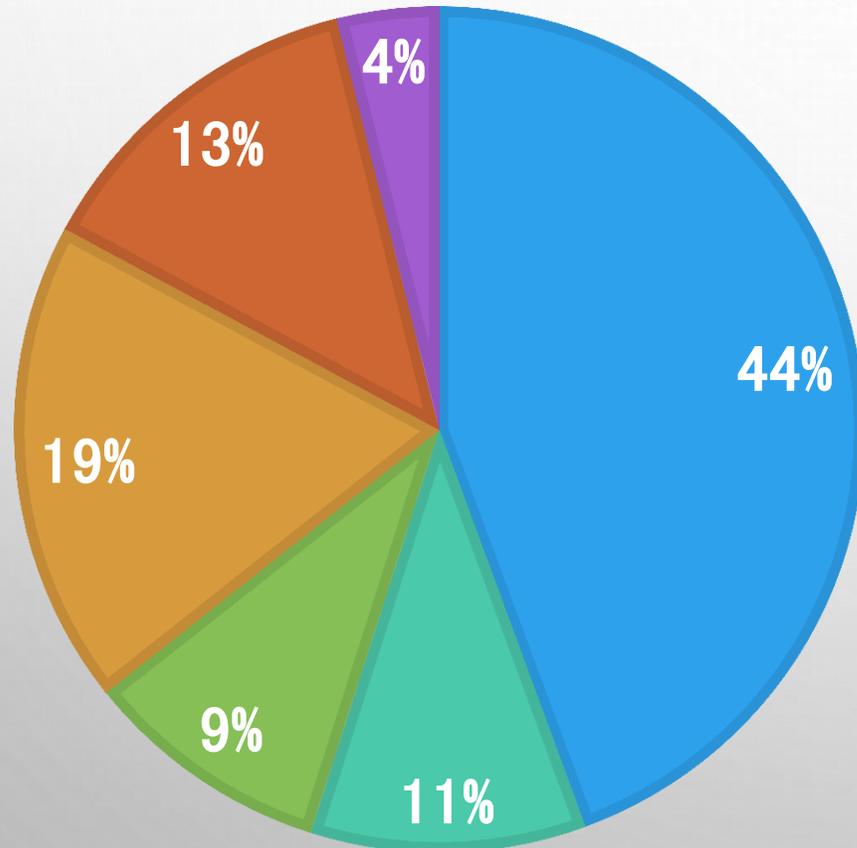


図2 コード化後の話題分析のグラフ

- 原文のコード化を図り，文章の単純化を図った.
- そのコードに対して話題分析を行ったところ，「把握・個別性」「考える」「看護技術」「思い」「理解+できる」「その他」と分類することができた.
- 第1段階と大きく異なったのは，文章を単純化したためだと考えられる. しかし，カテゴリ名から外れるものではなく，コード化したことは有用であったと考えられる.

話題分析2

- この中で、テキスト数が最も多い「**把握・個別性**」に着目することにした。多い、ということは、学生が成長と感ずることが多かった分類、と考えることができる。
- 下記の特徴があると考えられるため、コードを再度原文に戻し分析を開始することにした。

コード化 : 文章を単純化したため、語彙が豊富でなく分析には適していない

原文 : 語彙が豊富だが、複雑さから分類しづらい

「把握・個別性」の基本情報

表3.「把握・個別性」の基本情報

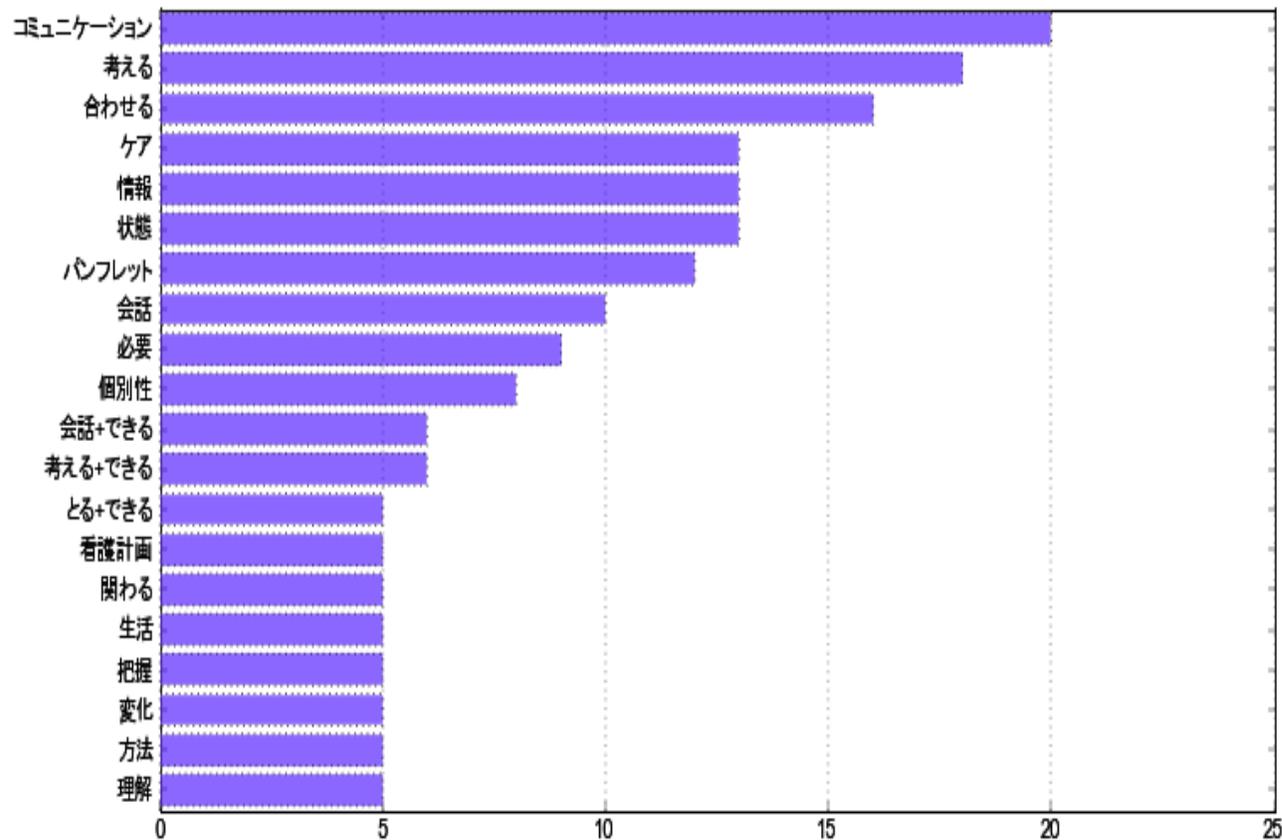
項目	値
総行数	107
総文数	109
平均文長(文字数)	18.4
述べ単語数	718
単語種別数	274

表4.「把握・個別性」の品詞と出現頻度

品詞	出現数
名詞	523
動詞	166
副詞	9
連帯詞	8
形容詞	9

- ・タイプトークン比0.382
→豊富とは言い切れないものであった.
- ・名詞523 動詞166 形容詞9 副詞9 連帯詞8であった.
- ・学生が実習での成長がどのようなものか、何をできたのか、という言葉に注目する. また、品詞の出現頻度から動詞・名詞・形容詞に限定する方が成長を特定できると考えたため、分析の対象を動詞・名詞・形容詞に限定した.

「把握・個別性」の単語頻度分析



コミュニケーション, 会話+できる, 情報, 理解, など, 個別性を把握するのに必要な行動に関する言葉が見られた.

・パンフレット, 看護計画, 生活, 変化, などは個別性を把握した結果ないしは個別性を把握するための目的としての言葉が見られた.

単語頻度分析から読み取れる成長

コミュニケーション
会話+できる
情報
理解

個別性を把握する手段

パンフレット
看護計画
生活
変化
ケア

個別性把握の結果できた
こと

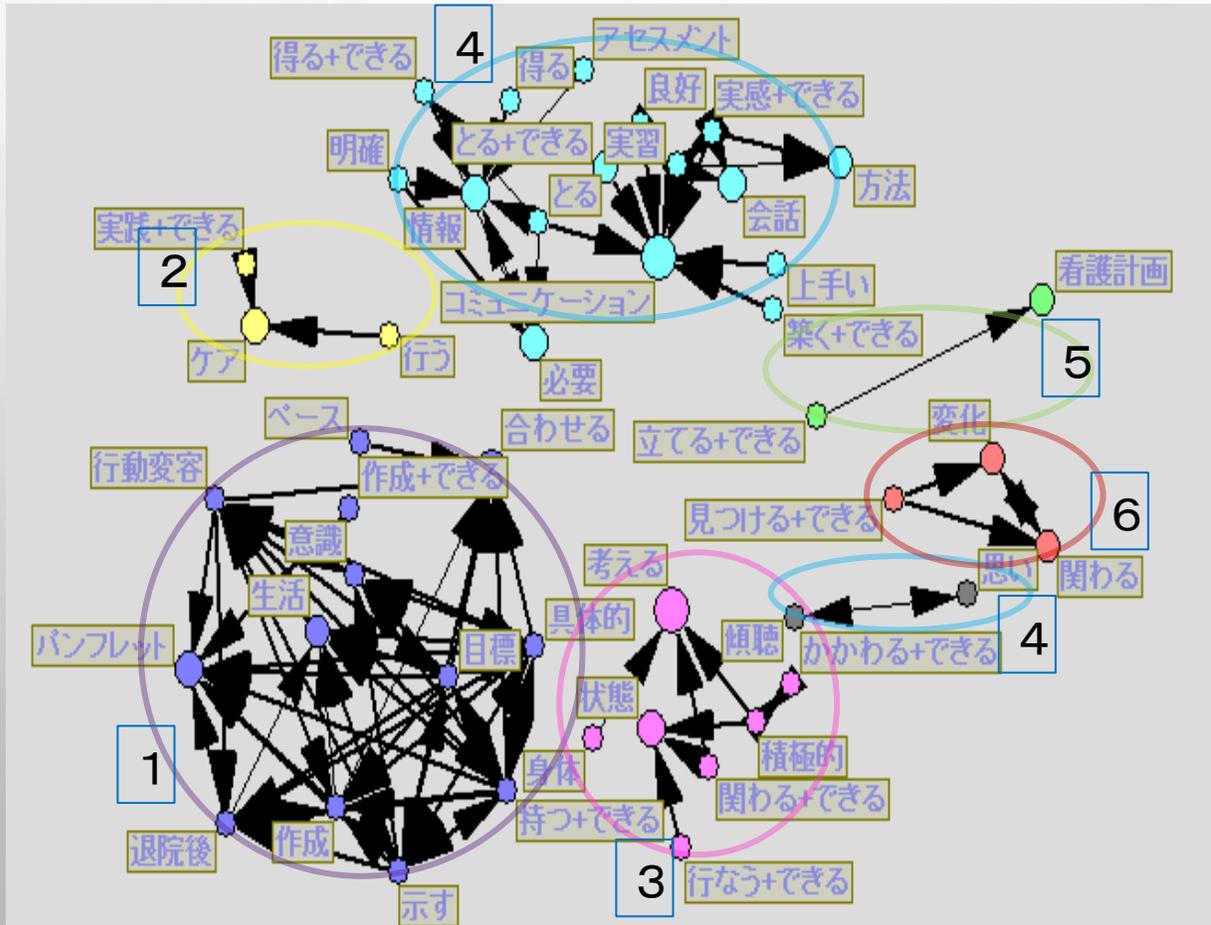
学生の成長



言葉ネットワークの目的と設定

- 言葉一つ一つのミクロな領域に着目するのではなく文章全体の特徴を探るために言葉ネットワークを見ることにした.
- 設定は, 共起関係, 抽出する言葉は文脈の全体性を把握するため話題一般とし, 信頼度を60にし, 出現回数は2回以上とした.

言葉ネットワーク



1. パンフレット作成に関すること.
 2. ケアに関すること
 3. 考えること
 4. 患者とのコミュニケーションについて
 5. 看護計画にかかわること
 6. 変化に関すること
- に成長を分類することができるものと考え
る.

図3 言葉ネットワーク

The background features a light gray gradient with several realistic water droplets of various sizes scattered across the frame. A faint, large circular pattern is visible in the center, consisting of concentric lines that form a subtle watermark or design element.

まとめ

成長と困難感の関係について

千田ら¹⁾の成人看護学実習での学生の困難感に関する研究によれば、

- 1, 看護援助の実施
- 2, 看護援助の範囲と意義
- 3, 患者との関係性の構築
- 4, 実習指導者との関係
- 5, カンファレンスの実施とその場における討議
- 6, 看護過程の展開と記録の記載方法
- 7, 学習課題の遂行

の7つのカテゴリーを学生は困難と感じていると示唆している。

- 今回の学生の成長において、個別性・把握に着目したが、学生の成長は、困難感のカテゴリーの赤で示した、1, 2, 3, 6に該当している。
- 逆説的に考えれば困難であったからこそ、学生はその困難解消に向け努力し達成できた事柄を、成長と評価したのではないかと考えられる。

先行研究との類似点および差異に関して

- 先行研究で²⁾「慢性疾患を持つ対象の状態に合わせた看護」の
カテゴリーがある。

その構成要素の一部に

- パンフレットを用いた指導の重要性
- 対象の状態に変化に合わせた看護計画の修正

の2つが含まれている。

「考えること」「コミュニケーション」に関することを除いては、

テキストマイニングの手法を用いた本研究でも似た結果を得られたと考えられる

似た結果が得られた理由としては、

- 成長報告がレポート形式ではなく、箇条書きのもので、詳細に書かれていなかった
 - 質的研究で、すでに網羅されている可能性がある
 - 対象となるデータの数が少なかった
 - 成長BEST3であり、成長したことすべてを扱っていない
 - コミュニケーションを行った結果、何を学べたか、という点に焦点を当て学生が記述したためではないか
 - 成長と学びという言葉の性質が異なっている
- 以上の5点が考えられる。

コミュニケーションに関して

- 個別性・把握のクラスタの中で単語の中でコミュニケーションは最もみられ、多くの学生が成長を感じていたものと考えられる。
- このことは、既述した困難感の中に他者との関係がカテゴリーの中に2つ示されていることから、学生は実習の場で新たな対人関係を形成していくプロセスを困難と感じており、このことを成長につなげられた学生が多いことを示しているものと考えられる。

コミュニケーションが、学生の学びの先行研究²⁾に出現しなかった理由は、

➤ コミュニケーションはあくまで、看護の手段の一つであり目的ではない。

EX) 情報収集は目的だが、それを行うための手段はコミュニケーションである。

➤ コミュニケーションを学ぶ、という場面は少なからず存在していた。しかし、学んだという体験を認知することが困難で、意識されなかった。

の2点が考えられる。

また、コミュニケーションを成長にあげなかった学生は、

➤ポジティブな面

もともとコミュニケーション能力が高かったために
成長としてとらえられなかったもの

➤ネガティブな面

コミュニケーションを実習期間中にうまく取れなかった
という特徴があるのではないかと考えられる。

コミュニケーションの苦手な学生への支援

- 酒井⁴⁾は、対人関係を苦手と言う学生は、過剰な他者への意識や自己に対する否定感, を持っているとしている。
- ネガティブな面で成長としてとらえられなかった学生は, このような特徴を持っているものと考えられる。こうした学生を実習の中で早めにスクリーニングし, どのようにサポートし, 実習での達成を促せるよう教員の立場からの援助を考えていくことが必要と考えられる。

パンフレットに関して

- 成長の報告にはパンフレットという言葉が多く見られた。学生の学びの研究でも同じように、パンフレットの作成が学生の学びやとなっており、パンフレットの作成は特に目に見える成果物であるため、学生の成長として挙げられているものと考えられる。
- 患者にパンフレットでの指導が適すれば、学生にとっては良いものと考えられる。パンフレットが多く出現した背景はこのような理由のほかに、ややネガティブなものも考えられる。それは、教員による意図または意図しない指導での誘導が考えられる。

- 意図した指導

学習の達成度が低くなってしまいう学生にたいして、達成感が高いパンフレットの作成へ、学生の思考を誘導することで、学習を進めることがある。

- 意図しない指導

- 同年の学生間だけでなく前年の学生間での実習に関する情報のやり取りの際に、慢性期看護学実習においてパンフレットの作成が暗に示されている可能性が考えられる。
- また、教員自身にもそのようなイメージがあるため、意識しない中で学生へのオリエンテーションの際に説明を加えていることも考えられる。

本研究の課題と限界

本研究での対象は126名の箇条書きされた文章であり、長く記述されたものではなかった。そのため、感情的な面や具体的な面への記述が乏しくなったものと考えられる。その点が本研究の課題であり限界であると考えられる。

結語

- 学生にとっての成長をテキストマイニングでカテゴリー化した際に、「把握・個別性」「考える」「看護技術」「思い」「理解+できる」「その他」と分類することができた。今回「把握・個別性」に注目したが、学生が実習で困難を感じるものが、成長として現れていた。これは、実習内での困難な物事への援助が適切に行われているものと考えられる。また困難とは違うが、コミュニケーションに関しては、現代の学生の特徴であり、今後も成長につながるような教育・教育体制を整えていくべきである。

引用・参考文献

- 1)千田浩子, 堀越政孝, 武居明美ら(2011):成人看護学実習における看護学生の抱える困難感の分析, 群馬保健学紀要, 32, 15-22
- 2)石井秀行, 坪井敬子, 岡本裕子ら(2007):臨地実習における学生の学びー成人看護学慢性期実習終了後のレポート分析よりー, インターナショナルナーシングNURSING CARE RESEARCH, 6(1), 51-58
- 3)文部科学省(2006):「大学における学生生活の充実方策について(報告)ー学生の立場に立った大学作りを目指してー」
- 4)酒井美子(2010):コミュニケーションが苦手な看護学生の対人関係の特性から教育支援を考える, 群馬県立県民健康科学大学紀要, VOL5, 103-114
- 5)小島さやか(2012):文献から見た看護教育におけるポートフォリオ評価活用の現状, 新潟青陵学会誌, 4(3), 101-109
- 6)林優子(2003):成人看護実習(慢性期)における学生の経験による学び, 岡山大学医学部保健学科紀要, 13, 91-98

The background is a light gray gradient with several realistic water droplets of various sizes scattered across it. A faint, circular, textured pattern is visible in the upper center of the image.

了

ご清聴ありがとうございました.